

査読研究ノート

柏井園の軍国主義批判 ——『文明評論』誌上の論説を中心に

今高 義也*

要旨

日本基督教会の教師柏井園の言論活動の主題の一つであった軍国主義批判を、『文明評論』に掲載された論説を中心に検討し、柏井の文明批評家としての側面に光を当てる。

キーワード

歴史、軍国主義、キリスト教、独立運動、第一次世界大戦

はじめに

- 1 『文明評論』の性格
- 2 軍国主義批判
- 3 三・一独立運動および堤岩里事件をめぐる
おわりに ——晩年の神学思想について

はじめに

日本基督教会の教師柏井園（1870–1920）は、植村正久と共に神学教育に従事した東京神学社教頭、また日本人初の本格的キリスト教通史とされる『基督教史』（1914年）の著者として知られ、神学社の〈教え子〉である熊野義孝はその神学思想を「教養の神学」と呼んだ（「柏井園の教養の神学」『日本キリスト教神学思想史』1968年）。柏井の影響を受けた〈後輩〉としては、高倉徳太郎・石原謙・齋藤勇・山谷省吾らを挙げることができるが、他の日本近代のプロテスタントに比して、柏井園研究は立ち遅れているといわざるをえない。当面の課題は、『柏井全集』全六巻（1922年–1927年、警醒社）、同続編全五巻・別巻（1934年–1935年、長崎書店）に漏れた著作の探索・整理および長男光蔵が東京神学大学図書館に寄贈した一次資料の解読・翻刻という〈基礎研究〉と、それらに基づき柏井の生涯と思想の全体像を跡づける〈評伝研究〉にある。本稿は、晩年（40代後半）の言論活動の主題の一つであった軍国主義批判を、柏井が

* 執筆 者：今高義也

所属/役職：宮城学院中学校高等学校/教諭

E-mail: imataka@mgu.ac.jp

事実上主宰していた同人誌『文明評論』所載の論説を中心に検討する¹。キリスト教史家・新約学者として知られる柏井であるが、広く社会に働きかける文明批評家としての側面も、柏井の全体像を把握する上で看過できないと考えるからである。

柏井園の略歴

柏井園は、1870年7月24日、旧土佐藩士の長男として、高知県土佐郡旭村に生まれた。父祖は三好源氏の末裔という。父重宣は板垣退助と共に会津戦争に従軍、祖母も板垣を信奉していた。幼くして母を失い、継母の実兄西森真太郎から漢学を学ぶ。民権派の教員の罷免に抗議し、同志生徒と共に高知中学校を退校、片岡健吉を校長とする私立高知共立学校に移る。同志生徒には片岡の二男恒次郎や、後に東北学院に進み共に米国へ留学することになる市村竹馬も含まれていた。その後、継母とも死別、そのおよそ一年後の1887年6月に、日本基督教会高知教会において米国南長老派宣教師グリナンより受洗。同年11月、同志社英学校に入学、歴史学徒となる志を立てる。教員には浮田和民らがおおり、同志社教会の礼拝では浮田のほか金森通倫・宮川経輝らの説教も聴いている。在学中の1890年1月に校長の新島襄が死去、1891年に卒業して帰郷し、母校の共立学校および米国南長老派宣教師の経営する高知英和女学校の英語教師を務める。1892年1月、新島の二周年記念会で追悼文を朗読。1892年7月、大挙伝道で高知を訪れた植村正久に知られ、その推薦で翌1893年9月に上京、明治学院神学部講師となる(英語と歴史を担当)。併せて『福音新報』の編集にも従事し、自らも寄稿する。1894年『日本評論』掲載の「ダンテの地獄」は徳富蘇峰の『国民新聞』で注目された(同志社の先輩蘇峰とは終生親交を結ぶ)。1903年4月、明治学院神学部教授に就任、同年9月渡米してユニオン神学校並にコロンビア大学に学ぶ。共に留学した同郷の盟友市村竹馬は1904年11月にニューヨークで客死する。1905年4月に帰国後、明治学院を辞して植村の設立した東京神学社の教授となり、教頭職につく。同年の5月から11月にかけて、植村正久・内村鑑三・小崎弘道と共に「新約聖書改訳会」を組織、同会の書記と下訳(ヨハネ伝)の作成を担当したが、同会の事業は中絶(植村と内村との確執が原因か)。1906年、日本基督教青年会同盟の幹事となり、雑誌『開拓者』を創刊、主筆として二年間編集にあたり、1907年には万国学生基督教青年大会の開催に尽力する。1911年、植村の呼びかけになる雑誌『宗教及び文芸』の創刊に参加。1914年5月、同志と共に雑誌『文明評論』を創刊、同年8月には『基督教史』を出版した。1917年1月、『文明評論』掲載の田川大吉郎「方法を知らぬ民」をめぐり、皇室の尊厳を冒瀆したとして東京地検が告発、柏井も編集者としての責任を問われ、同年3月「新聞紙法違反」の罪により禁錮二ヶ月執行猶予二年の判決を受ける。東京神学社を辞した柏井の生活は窮迫する。1918年日本基督教会千駄ヶ谷教会の主任伝道者、1919年4月、同教会牧師に就任したが、1920年6月25日、白血病により満50歳を目前に死去した²。

1 『文明評論』の性格

『文明評論』創刊の「志」

『文明評論』は1914年5月に創刊された同人雑誌である³。初めに、第1巻第1号の巻頭に置かれた「我等の志を述ぶ」（署名は「文明評論社同人」となっているが、筆者は柏井と推定される）によって、『文明評論』創刊の企図について確認しておきたい。その冒頭、柏井は当時の日本社会の現況について次のように〈観察〉している。

世は大正と改まりてより未だ二年に満たず。然かも時局と風気の変遷急激を極む。此の間喜ぶべきもの多くして、憂ふべきもの亦実に少からず。憂ふべき敗類の事実は続々として暴露せられつつあり。此の憂ふべき事実を取り扱ふ人心の態度にも亦憂ふべきもの無きにあらず。然れども社会は大体に於て進歩しつつあり。教育の效果、外国思想の感化、文芸趣味の普及は、教養ある社会を造成しつつあり。彼等は新聞紙上に其の名を載せられず。然れども其の然る人々よりも、却て良く文明の趣味を了解し、思想上の問題を考へ、眼を広き水平線上に着くる能力を有す。我国に於て此の種の社会は年とともに拡張せられつつあり。随って精神的文化を扶植するに足るべき田園は次第に広きを加へつつあるなり。ただ彼等は未だ精神界の戦列に立たず、冷静観照の態度を持し、其の下に立って進むべき大旆の翻へるを見るに至らず。／然れども教養ある人をして一層厳肅に思念し、宗教的の天地に入らしむべき刺激の与へらるること一にして足らず。

（「我等の志を述ぶ」『文明評論』第1巻第1号，1914年5月4日。下線は筆者，以下同じ）

明治維新からおよそ半世紀、日清・日露の戦勝を経て「時局と風気の変遷」は急激を極め、政治と社会の多方面で「憂ふべき敗類の事実」が暴露されつつある。しかしその一方で、「教育の效果、外国思想の感化、文芸趣味の普及」によって「教養ある社会」が形成されつつある。対外関係・天災・政変・「諒闇」等々、社会の不安定な情勢は「教養ある人」に「畏れと不安の情」を抱かせ、それが「宗教的の天地に入らしむ」べき「刺激」となって、キリスト教の感化の及ぶ範囲は拡大しつつある。——柏井はそこに、『文明評論』が日本社会に働きかける希望の根拠を見出している。その言論の目指す究極のヴィジョンは、次のように言明されている。

微力なる我等の手に成れる一小雑誌、固より之を以て大なる勢力となし得べしと思はず。ただ自己の天分と所信に忠実にして謙て勉めんと欲するのみ。然かも『文明評論』の名其一端を示す如く、絶東の我が愛する郷国に清美純潔なる基督教文明を建設するはこれ我等の夢なり、インスピレーションなり。我が国に存する文化の各要素、皆之が為に材料を供し得べく、之によりて永久性を帯び来るべきを信ず。此の故に我等は基督教の知識を開拓

し、進歩せる思想を紹介することを勉むるとともに、我等の立てる見地より文芸、政治、哲学、道徳の各方面に観察の光を投ぜんと欲す。

(同前)

「我が国に存する文化の各要素」が、キリスト教との出会いによって触発されて「永久性」を帯び来らしめられ、「絶東」のこの「郷国」に「清美純潔なる基督教文明」が建設される。——その「夢」＝「永遠の理想」の実現をめざし、新しい「基督教の知識」を吸収・紹介しつつ、日本人キリスト者として主体的に思索し「文芸、政治、哲学、道徳」についての批評を世に問う、というのである。

また柏井は、『文明評論』における批評の「態度」として、キリスト教の立場を鮮明に打ち出した「差別観」—キリスト教的思想とその他の（「異教的」）思想との峻別—を重視する方針を表明して次のように言う。

我等の態度は徹頭徹尾積極的にして又包容的ならんことを欲す。されど基督教文明は積極的なるとともに批判的なり、包容力あるとともに差別観を重ず。心霊的生活と唯物的生活、基督教的文明と異教的文明、理想主義の文芸と享楽主義の文芸、ここに我等の戦線を布きて守るべく撃つべき分野あり。由来我が国人の思想は動もすれば差別観に於て厳正ならず。忘れ易く、感染し雷同すること多くして、真なる意味に於て考ふること少し。故に思想の原野同一色彩に化すること多くして単調の弊を見る。之を救ふべき責任ある基督教の文壇の思索も評論も一層精細に且つ厳正ならざるべからず。齊しく泰西の新思潮に駕して来るものと雖も、麥と稗子と、山羊と綿羊とは之を識別せざるべからず。知ると取るとは別なるを知らざるべからず。政治論に於ても決して俗論に雷同せざるべし。忠誠の皮を着たる野心家、道義の蔭に潜める保守的思想の跋扈に警戒せざるべからず。

(同前)

このような〈思想闘争〉の姿勢は、柏井の言論において一貫している。かつて柏井が主筆となって創刊された『開拓者』創刊号の巻頭言にも、次のような言明が見える。

開拓者の気風は又積極的ならざるべからず。徒に世を詛ひ他を排するは我等の取らざる所なり。然れども我等の主義に反対せる思想傾向勢力に対しては旗幟鮮明なる戦を戦はざるべからず。ヘンリー、ウァンダイク氏はその近著に於て基督教文学の対戦すべき三の敵あるを教へたり。第一の敵は武功と戦勝を崇拜する気風の増大なり、第二の敵は富の崇拜の増長なり、第三の敵は軽薄の精神の増長なりと、(中略)此等は亦日本の基督教及び基督教文学の戦ふべき敵に非ずや。

（『開拓者』の使命）『開拓者』第1巻第1号，1906年2月10日）

「基督教文学」の思想的な〈敵〉として①軍国主義 ②財力主義 ③享楽主義を挙げるこのヘンリー・ヴァンダイクの思想は、柏井の立場と軌を一にするものとしてしばしば引用されるものである⁴。

さらに柏井はメディアの責任についても触れて次のように述べている。

近時言論の社会徒らに争気に駆られ感情に支配せられて、正しく事実を報道し公平に之を解釈するの責任忘れられ易し。我等は政治の局面に於て恩怨なく党縁なし。ただ真実を重んずるものを愛し、又知り得る限り忠実に事実を研究し解釈し評論する態度を持せんと欲す。原始基督教の歴史に対しても、大正時代の歴史に対してもこの態度は一ならんことを期す。学界の事亦然り。

（前掲「我等の志を述ぶ」）

「知り得る限り忠実に事実を研究し解釈し評論する」態度は、原始基督教の研究においても大正時代の文明批評においても一貫する、と柏井は言う。「永遠の理想」に照らし「眼前の歴史」を批評することが、〈キリスト教史家〉であり〈ジャーナリスト〉である柏井の基本姿勢であった。

脚を歴史的事実の上に立て、眼を永遠の理想に着くるは基督教本来の態度なり。永遠を重んずるが故に眼前の事実を軽ぜず、短少なる事実の裡に永遠の意義あるを知るが故に、正しく之を知り、正しく之を伝へ、正しく之を解釈するを貴ぶ。

（「事実及び永久の観念より」『開拓者』第9巻第4号，1914年4月1日）

柏井が『文明評論』を発行し続けた背景にも、「眼前の歴史」の「短少なる事実」のうちに「精神的意義」を洞察し、それを「闡明」して「世道人心」を導くという、キリスト教ジャーナリズムの担い手としての使命感があった。

未曾有の大波瀾を眼前に見つつある今日に於て大問題は続々として我等に提供せられ候。我等力乏しく識浅くして遺憾なき応酬をなし得ざるは耻づる所に候得ども、力の及ぶ限り眼前の歴史に籠れる精神的意義を闡明し世道人心に貢献する所ありたく希望致し居り候。

（「編輯局だより」『文明評論』第1巻第6号，1914年10月1日）

『文明評論』の巻末近くには毎号時事問題の短評と時事日誌が掲載されている。ここにも、時々刻々の「眼前の歴史」をかりそめにする事なく〈観察〉する柏井の姿勢が現われているとあってよいだろう。

以上、『文明評論』における柏井の批評の基本姿勢について創刊号巻頭の「我等の志を述ぶ」を中心に検討したが、このような言論・ジャーナリズムの実践の根柢にあるところの柏井の問題意識について確認しておきたい。『文明評論』が「発行せらるやうになった原の種子」について、柏井は次のような回想を記している。

或る年の復活節の午後二三人の人が或る家に落ち合ふてさまざまの話をしたが、我々の考へたり話したりして居る所と實際行ふて居る所との間に大分距離がある。理想に照らして日々の生活を点検して行くことや又実際の工夫から真理を發明して歓喜を感ずると云ふ事が少い。大に考へ祈って我等の生活を立て直さねばならぬ。然して毎週一度相会して色々励み且つ發明した処を語り合ふたれば有益であらうと云ふことになった。その後時々小かな祈りの会合が催された。感謝すべき種々の賜が与へられて、集る人も増し加つた。

五年前の五月から文明評論が発行せらるやうになった原の種子はこの小き祈り会にある。一身に体験した処を拓めて之を天下に行いたいと云ふ志は、此の小雑誌を興すに至つた目的の底に横はつて居る。たゞ志ありて努むること足らず、期せし事の万一をも実現し得ざるは我等の耻づる所であるが、其の頃考へた事が今も益々必要であることを思はざるを得ない。

(「編輯だより」『文明評論』第5巻第5号、1918年5月1日)

この述懐によれば、信仰に基づく「理想」に照らして自らの生活を「点検」し、「一身に体験した処を拓めて之を天下に行いたい」という「祈り」＝「志」が形をとつたものが『文明評論』であった。内的経験としてのキリスト教信仰／思想と、外部世界（激動する日本および世界の情勢）への対応が相即するところに、思索と言論が生み出される。このような「内外生活の一致」した信仰的／社会的主体の形成の必要性を、柏井は次のように主張している。

基督教の神はプロオチヌスの神、スピノザの神、仏教の真如と同じからず、生きて働きつゝある神なり、倫理的の神なり、正義の意志を拡充して罪惡を滅さん為に戦ひつゝある神なり。其の人に求むる所は心を清くして神に交るのみならず、神の王国建設の為に尽瘁努力することなり。第二の根柢は耶蘇基督の教訓と模範とに在り。彼は孤独なる聖者にして、しかも万軍を麾きて進軍する勇将なり。其の教旨は広大なりと雖も、要するに、何を食ひ何を着んと思ひ煩ふことなく神の国と其の義を求むるの志を与へ、又終に葡萄の枝の

其の幹に連るが如く基督に由りて神と交通する生命の道に導きたり。基督偕に在り、又基督の為に尽す、これ基督教生涯の二方面なり。内面的性質を有する英雄的精神こゝに於て生ず。これ基督教が日本に与へざるべからざる所なり。

我等の内外生活一致の根柢はこゝにあり。内面生活の消息を解せる人をして更に外面的活動に向かはしむる道こゝに指示せられたり。新しき英雄時代来らざるべからず。これなくば日本将来の政治や宗教や実業や芸術を誰に托すべき。若し夫れ内に悠々たる神秘の天地を領し、豊富なる内的生活を経験して立って社会の面に活動し、正義の旗下に健闘し、自ら欺かず人を欺かず、言信ずるに足り行頼むに足る人多く出で、社会の中枢に立つに至らば、こゝに於て真個の偉大なる日本は建設せられん。虚偽の社会、偽善の政治を打破して、内外の生活沛然として疎通する時代を来らしめよ。

（「内外生活の一致」『文明評論』第3巻第10号、1916年10月1日）

けだしここには後の近代日本プロテスタント思想史において指摘される所謂「信仰と行為、福音と倫理の二元的分裂」（大内三郎「日本プロテスタント史」、海老沢有道・大内共著『日本キリスト教史』日本基督教団出版局、1970年）傾向の自覚と、その克服の試みが見て取れるのではないか。『文明評論』というメディアを通して「虚偽の社会、偽善の政治を打破」せんとする柏井の〈戦い〉の根柢には、このような「内外生活の一致」を目指す信仰が横たわっていたとみられる。

2 軍国主義批判

柏井の軍国主義批判は、『文明評論』が創刊されて間もなく勃発した世界大戦＝「眼前の歴史」の推移を注視する中で展開された。

戦争の意義動機ともに単一ならざれども軍国主義との戦これ世界の識者の希望を鼓吹する一旗幟に候。今は日本国内に於ける軍国主義に対しても大に戦ふべき時機に候。

かるが故に余は我が政府が膠州湾〔青島〕を攻むるに至りし動機とその径路につきては今猶ほ大なる疑問と深き憂慮を抱くものに有之候。

（「編輯局だより」『文明評論』第1巻第6号、1914年10月1日）

軍国主義は〈国益〉のためならば「手段を選ばない」。それは人格の価値の軽視と表裏である。今日の「日本の国民性を改造する」ためには、「人格的の神を啓示し個々人の人格の価値絶大なるを説」き、宇宙は「倫理的なる人格に支配せらるる」ものと信じるキリスト教の「人格的世界観」が必要である、と柏井は主張する。

文明の基礎には人格あり。偉大なる人格の印象せられたる文化と事業には新しき変化の出立点を見出し得る不変の源あり。又思想上に於ても発展進化の法則の蓋然の真理たるを認め万事を流動的に見る傾向甚だ強くベルグソンの変化の哲学が持て囃さるる現代の思想に於て進化発展以上に立てる安定不動なるものを捉へ、変のうち不変を与へ不変にして変じ得る余地を見出さしむるものは人格の観念にあらずとせんや。人格観念を欠ける東洋思想には、一方には発展なき固定あり一方には危険なる変化あり。頑固なる忠君愛国主義の人、己が君国の為ならば他の君国を侵略するに手段を選ばず。又制度の不変を維持する為に人格の価値を軽視す。今日日本の国民性を改造するに最も必要なるは人格の世界観なり。宇宙は倫理的ならぬ力に支配せらるるにあらず、又盲目なる運命に左右せらるるにあらずして、倫理的なる人格に支配せらるることを信ずるに至らば、その信仰が深く国民の生活を支配するに至らば、万事に於て大なる相違を生ずべし。思想上に於ても今日の如くたゞ傾向流行に支配せられずして、新しきものを了解し受容するとおもに独自一個に忠実なる地位を守るならん。政治上に於ても政争險悪の性を帯びず、英国の政党政治に於けるが如く相互の人格を尊重し、主義によりて争ひ復仇の動議によりて戦はざるを得るならん。

(「変と不変」『文明評論』第2巻第1号, 1915年1月1日)

また柏井は、日本における軍国主義台頭の歴史的背景について次のように指摘している。

我が国は戦乱の渦中に投ぜりと雖も、幸に東洋の一角に隔離せる為に戦争の苦痛を忍被ること多からずして反って利益に浴すること多し。僅かに青島の一城を陥れし功によりて幾万の人に勲章賞金は雨の如く与へられ、社会に満てる気分は浮華淫蕩、歓楽を追ふて走れり。欧州諸国民が戦争によりて味わひつゝある苦き健全なる教訓は我が国人の味ひ得ざる所なり。回顧すれば維新以来余りに幸運国家の歩みに伴ひ、日清、日露の対戦さへも光栄ある勝利に帰せし為に、国民の驕慢利己の心は増長するのみにて、肅然として自ら省み自ら正すの機会なく荒怠今日に及べり。宛も幸運のみ打ち続き生活の困難の無き人が何等かの打撃に逢はずんば覚醒自ら修むる心を起し難きに同じ。

(「内外生活の一致」『文明評論』第3巻第10号, 1916年10月1日)

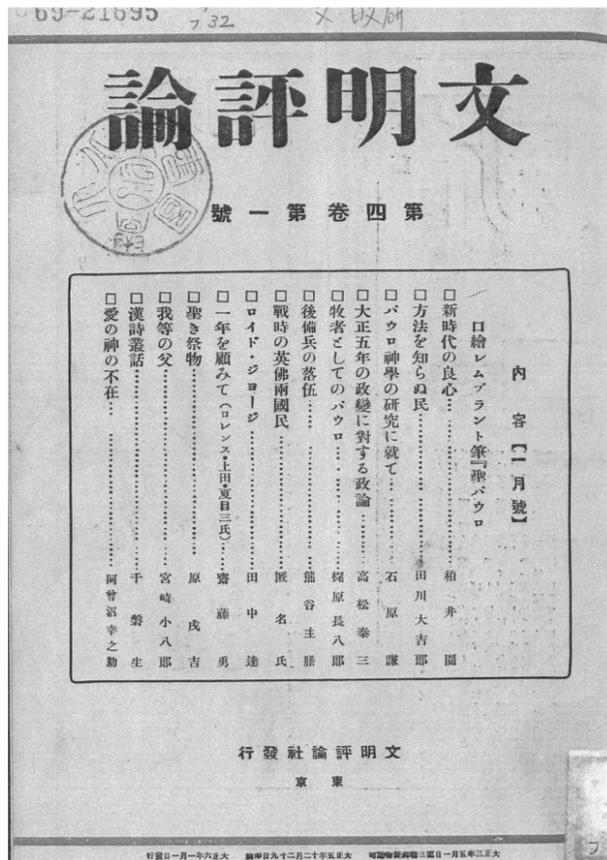
日清・日露の「戦勝」が災いとなって「国民の驕慢利己の心は増長」し、今日軍国主義と享楽主義がこの国を蔽いつつある。「清美純潔なる基督教文明の建設」とは逆行する「郷国」の姿に柏井は憂国の念を深め、『文明評論』同人も批判の声を高めつつあった。田川大吉郎の筆禍事件はそのような情勢の中、起るべくして起こったといつてよいであろう。

田川大吉郎筆禍事件

1917年1月、田川大吉郎は『文明評論』第4巻第1号（別掲図版）に寄稿した「方法を知らぬ民」において、大隈内閣総辞職の後寺内正毅を天皇に推薦し組閣を実現させた元老山県有朋を激しく非難した。その問題の一節は次のようなものである。

彼等が今日の如く、屹然として 陛下の前に立ち塞がり、陛下に此くお勧め申し上げたと言ひ、此く御教へ申し上げたと言ひ、それを得意らしく、天下万衆の前に揚言して憚らないなら、陛下の神聖は漸く傷つけられ、その 聖徳はだんだん疑はるゝやうに為るので有る、彼等は 皇室の尊栄を發揚すべしと称しつゝ、 事實は其の専恣狼戾なる言動に因って痛く 皇室の尊栄を傷つけつゝ有る、 彼等はその 皇室の尊影を發揚すべき方法を知らない者で有る、 看よ、何れの国、何れの時代に、此の如く無責任にして、僭上忌憚なき権臣ありしかを、日本国民は須らく目を刮して内外古今の政史を読むべきで有る、

（田川大吉郎「方法を知らぬ民」『文明評論』第4巻第1号、1917年1月1日）



田川「方法を知らぬ民」を掲載した『文明評論』第4巻第1号（1917年1月1日）

これが皇室の尊厳を冒したとして「新聞紙法違反」に問われたのである。『福音新報』第1134号(1917年3月22日)には、次の記事が見える。

田川大吉郎氏らに関わる皇室の尊厳を冒したりと云う事件は去る〔三月〕十四日宣告ありたるが、田川氏は禁固五ヶ月、罰金百円、之を掲載せる文明評論の編輯人柏井園氏は禁固二ヶ月罰金三十円、発行兼印刷人たる田中達氏は禁固二ヶ月罰金四十円、柏井田中両氏には刑の執行猶予二ヶ年を附せられたり。

柏井は「編輯人」として田川の筆禍に連座したかたちであったが、同じ『文明評論』誌上には、柏井自身も次のような政界批判を寄稿していた。

我が国に於ける良心の現状は如何。商業的良心、芸術的良心、宗教的良心等仔細に考察し来れば言ふべき事多からん。然れども余は其の一斑を示す為に維新以来の政治家が如何に此の良心を取り扱ひしかを見んと欲す。善き良心を有するものは己の良心を重んずるのみならず他人の良心を神聖なるものとして尊重せざるべからず。即ち他人の節操主張に対して敬虔の態度を持せざるべからず。然るに日本の政治家は此の点に於て不謹慎を極めたり。謹恪忠誠の人と称せらるる山縣公より政治界の革清を標榜して立ちし大隈侯に至るまで、議員の買収に手を着けたり、新聞記者を買収したり。かくて政治的良心の頹廢は滔々として底止する所を知らざらんとす。第二に彼等は良心の神聖なる部分に属する事を猥りに検束して小模型の裡に入れんとせり。(中略)文部省の〔教育勅語解釈による〕教育主義は澆濁たる青年の良心を尊重せずして之を郷愿とし、偽善者となしたり。(中略)日本の政治界に先づ己の良心を操守し、次に他人の良心を尊重し、又政治的良心に積極的内容を附与する政治家出づる時、初めて政治上の新時代は来るべきなり。

(「新時代の良心」『文明評論』第4巻第1号、1917年1月1日)

この筆禍事件当時の柏井について、比屋根安定は次のように回想している。

柏井は、(中略)いずれかという、弁よりは筆の人であった。『福音新報』に載った諸文ももちろん結構であったが、ほとんど独力をもって編集した『文明評論』誌上、時勢を論じたものは、講壇からとすこぶる異なった警世文字であった。

柏井の生れた土佐は、板垣退助その他が早くより自由民権運動を起し、彼等は海南自由党を結んだ。柏井の学んだ共立学校の校長は片岡健吉であって、彼は板垣の配下であったから、柏井が自ら政治問題に関心したことはいうを待たない。柏井が『文明評論』に田川大吉郎の元老政治を非難した文を寄せたのが、当局の忌諱に触れ、田川も柏井も法に問わ

れるに至った。裁判所では、柏井に厚意を寄せて、一種の誘導尋問をして、柏井が田川の文をろくに見ないで載せたのであろうと答えさせ、無罪にしようとつとめた。しかし柏井は、いや、綿密に読んでのち、掲載したと敢て述べたので、柏井は執行猶予であったろうが、処刑の宣告を受けねばならなくなった。

しかし柏井は田川の文を、実はろくに読まずに載せたそうである。執行猶予の期間、柏井は公に神学社で講義をすることを許されないので、富士見町教会の一室で講義していた。
(比屋根安定「柏井園」『教界三十五人像』、日本基督教団出版部、1959年)

事実、柏井が自身筆禍を辞さぬ覚悟で筆を執っていたことは、執行猶予期間となった事件後に『文明評論』の「編輯だより」に掲載された次の記事からも明らかであろう。

世界は益々問題多く努力を要する時代と相成り候。昨年一月発行の本誌に掲載せる社友の政論の為に筆禍を蒙りしは御承知の事に候が、此の事ありしが為に我等は政治論を掲載するを避けざるのみならず今後も之を勉めんとするものに御座候。何となれば近頃『ジャッパン・アドバタイザア』の寄書家の論じたる如く日本の危機は宗教的にして又政治的なり宗教上の障害も政治的勢力より来る者少なからず。今日の日本に於ては政治を除外して主義の為に戦はんとするは殆ど不可能の事に有之候。

(「編輯だより」『文明評論』第5巻第1号、1918年1月1日)

執行猶予期間中に発表された論説

実際、柏井が執行猶予期間中も第一次世界大戦の戦況を注視しながら、戦争・軍国主義・日本の進むべき進路をめぐって思索し発言し続けたことは、次のような論説からも明らかに看取されるだろう。やや長くなるが以下に三つの発言を引用しておきたい。

抑も今回の大戦から反射する光は、単に政治経済に注がる、のみでなく、哲学、宗教、文学までも戦ひの凄烈なる光に照らして点検せられつゝある。自然主義は此の戦争にどれ程の関係があるか。ニイチェやベルンハルディの学説との関係は如何。カント、フィヒテ、ヘーゲルの哲学に責任存するや否や。基督教国と称ふる国民の信じて居た宗教は果して基督教であったのか、その信じて居た父は真に基督の啓示した万民の父であったのか、実はトル、オゼンの如き国民的の神でなかったか、今更の如く種々の根本問題が心ある人の省察の題目となって居る。余は今までの基督教国に於て基督の精神が充分に行はれていたとは云はぬ。しかし是の如き場合に是の如く反射し省察する所に基督教の感化争ひ難きものあると思はざるを得ない。

(「社会及び人生に於ける反射的光明」『文明評論』第4巻第5号、1917年5月1日)

日本の道徳思想を根本的に改むるには、人の性を善いものと見る、人を高く買ふ信仰が根柢にならねばならぬ。基督教に由らねばならぬ所以の一はこゝにある。耶穌は神に対する人の信頼を教へたのみならず、人に対する神の信任をも教へた。彼は低い方から人を動す誘惑の力は充分に之を経験し洞察し得たに係らず、猶ほ人は高潔な刺戟に感じ犠牲を甘んじ自己を献ぜんと欲する熱望あることを知り之に訴へられたのである。(中略)

個々の人性の善性を信ずる信仰の根柢により之と、もに最善を信ずる信仰の根柢となるものは、歴史を支配する最善の力があつて最善の終極に帰着せしむるとの信仰である。此の信仰を見出し之をその国民に、又延いては世界の人類に教へた所に希伯來の預言者の功績がある。此の歴史の終極に達せしむるまでの神の経綸撰理の悠遠広大なるはこれ預言者が齎した使命である。(中略)

今日の日本に於て世界は最善なるものゝあり得べきことを信じ、人の本性の善を信じ、善なる力を組織し糾合して世界の大勢力となし得べきことを信じ得るものは、先づ之を基督教徒に期待しなければならぬ。道徳上の元氣は基督教会に於て最も緊張して居るべき筈である。我等は世界の最も善き人と呼応して、世界の良心とならねばならぬ。此の信仰の実現に抵抗する勢力は頗る頑強であるが、一度崩壊し始むれば案外に脆からん。最近の歴史は之を示す多くの例証を与へる。

(「最善を信ずるの信念」『文明評論』第5巻第4号、1918年4月1日)

倫理道徳と云ふ方のみから考へても基督教によりて与へられた大切な一事がある。それは即ち權威ある良心である。(中略)／良心の權威から云ふと国家至上主義の如き非常な危険説である。国家の爲と云ふ事が道徳の最高權威であるならば、それが国家の利益となれば、道徳法に反き良心を曲げて差問ない事になる。一步にても之に歩を譲つた宗教道徳は経国利民の具となり了。(中略)知るべし支那の儒教も仏教も政治家の治民の器となつて生命を失した。羅馬のストア哲学が帝室の勢力と結び、異教復興の方針に乘じ、之とともに昌え之とともに衰へたと似た所がある。之に反して基督教の感化の及ぶ所新しき良心の權威は確立し、国家の威力を以て利用する能はざる宗教の獨立は保証せられた。(中略)為政者の如何ともし難き宗教が日本に確立するや否之我國の永遠の利害休戚の岐るる所である。単に基督教であれば可なりと云ふのではない。政治家を利用せず政治家に利用せられず、信仰の自由の爲に死を以て争ひ得る基督教でなければ不可である。

(「羅馬帝国に於ける基督教徒」『文明評論』第5巻第9号、1918年9月1日)

柏井の執行猶予期間が明けたのは1919年3月19日であつたが、上記の発言は全てそれ以前に公にされているものである⁵。「国家至上主義の如き非常な危険説」であるとして、「信仰の自由の爲に死を以て争ひ得る基督教でなければ不可である」と主張している。千駄ヶ谷教会の牧

師として立とうとしていた柏井の言葉には、教会は「世界の良心」でなければならないという「緊張」した「元気」が現われている。

3 三・一独立運動および堤岩里事件をめぐる

未曾有の世界大戦が終結に向かう中、柏井は世界を統治する神の〈摂理〉を思い、これまでの世界史を軍国主義＝「異教主義」と「基督教主義」の争闘の歴史と捉え、ドイツの敗北により「異教主義の一大支柱たる軍国主義は倒壊」したとして、今こそ「鮮明に基督教的なる道徳、芸術、思想を振興すべき時である」と主張する。

世界の歴史は、異教主義と基督教主義との争闘の歴史である、肉と霊との戦の歴史である、自然に満足せる生活と、超自然の光に導かれて生きんとする生活との戦の歴史である。然して此の長き争闘の歴史に於て、今回の欧州大戦が意味重大なる回転機であらねばならぬ。（中略）

宗教改革当時の元気漸く沈銷して異教的の芸術、異教的の趣味、異教主義の哲学は異教的なる軍国主義専制政治と相結んで根を張り枝を延ばした。これが過去半世紀の真相であった。軍国主義は独逸独り覇を誇ったが、異教的の生活趣味は英米仏露何処にも跋扈した。カイザルの崇めた神がオーゼンやトールであったとすれば、多くの人はパンやヴィーナスを崇めた。数年前日本のある文士が「異教主義の勝利」を唱へたのは、全き真理でないとしても、少なくとも争ひ難き現象であった。

今や異教主義の一大支柱たる軍国主義は倒壊した。他の一方には異教主義の享楽的生活も亦鉄火の洗礼に逢ふて覚醒した。己の快樂の為に生きず世界の人道の為に死ぬる精神は火の文字を以て表示せられた。これ実に異教主義に復た起ち難き打撃を加ふべき時である。鮮明に基督教的なる道徳、芸術、思想を振興すべき時である。

（「永久的進転」『文明評論』第6巻第1号，1919年1月1日）

三・一独立運動の鎮圧および堤岩里事件は、かような歴史の「回転機」たるべき時に、日本植民地支配下の朝鮮において発生した。ヨーロッパでは「倒壊」したはずの「異教主義の一大支柱たる軍国主義」が、「絶東の我が郷国」においては依然「跋扈」している、と柏井は見る。

三・一独立運動と堤岩里事件

1919年4月1日発行の『文明評論』第6巻第4号⁶の「日誌」欄には、新聞報道が制限されている中ではあったが、独立運動の動きを伝える情報が摘記されている。

- [三月] 五日 (水) 朝鮮に於て李太王殿下国葬当日より引続き暴動勃発の状報ぜらる
 六日 (木) 朝鮮擾乱停まず総数百六十万と報ぜらる
 八日 (土) 朝鮮黄州口に於て大道教徒三百名大検挙
 十五日 (土) 麹町区所在朝鮮総督府経営の朝鮮留学生寄宿舎生徒六十九名同盟退舎し目下紛擾中.

(『文明評論』第6巻第4号, 1919年4月1日)

そして詳しい情報が入り始めた翌月に発行された同誌第6巻第5号(1919年5月1日)「事実と観察」欄で、独立運動への弾圧を批判して柏井は次のように述べている。

国家の名に於て行はれた罪惡の大部分は軍閥が大部分の責任を負ふべきであるが、其の軍閥は、本元の独逸の軍閥の偶像が倒れた今日、猶ほ頑として勢力を張りつゝある。朝鮮の総督府の朝鮮統治の大方針は果たして如何であったか。然して今回の騷擾となった今日、憲兵兵士は如何なる事をなしつゝあるか。之を公にすることは出来ぬが昨今朝鮮の友人〔秋月致か〕から来った通信を読み、神の前に犯されつゝある罪惡を思ふて恐懼に堪へず、蒔きしものは刈らざるを得ず、国家の将来は如何であるか、寒心に堪へざる次第である。昔し蘇老泉は審敵の一篇を著して憂在内者本也憂在外者末世と云ひ外憂之不去聖人猶且耻之内憂而不為之計愚不知天下之所以久安而无變也と云ったが、日本今日の憂は朝鮮ではない、支那ではない、憂は内に在るのである。国家の将来を憂ふる者の熱血を瀝いで努力すべきは、この内なる憂を去ることである。それではなくは人種差別撤廢を叫んでも何の權威があるか。

(中略)

今日の必要は、国家の権利を主張するよりも、自ら反省して今日の一変したる世界に立ち得る道を思ひ、隣邦や新属の民に対する政策や風俗生活に厳密なる反省を加へ根本的の更生をなすに存する。禁酒廢娼は世界の輿論たる今日、造酒高は年々増加し遊蕩費は急速に増加しつゝある。我が国家が挙げられた天から陰府に落とされぬやうに懺悔し祈り努力するは我が徒の責任である。

(「憂は内に在り」『文明評論』第6巻第5号, 1919年5月1日)

かなかに勉めておられる。其の労多とすべしである。然れどもこれは石坂氏一人としての行動である。氏を代表として調査せしめた日本基督教会同盟は何を為しつゝありや。ただ僅に教会同盟会長副会長常議員二十余人の名を列ね、朝鮮人の被害教会再建の資金一万円を募りて同情を表する広告を見たのみである。然して更に驚くべきは其の広告の末文に『但し朝鮮総督府の某貴官〔長谷川好道総督〕は此の爲め已に金一千五百円を御寄附に相成候』と附記してあることである。何等の不見識ぞ。堂々たる日本基督教会同盟は、朝鮮総督府が自らなした批政の尻拭の手伝をなすに止まるか。石坂氏が七月十八日の『護教』社説に明記する所によれば、『彼等の言ふ所に拠れば京城を距る廿四五哩を去る堤岩里に一の基督教会堂がある。過日日本陸軍の一中尉は、兵卒を従へて来り講話をするからとて村民二十三名を会堂に集めた。中尉は講話の後、基督教に就て質問し、改宗を迫ったが、村民これに応じない。中尉は外に出て、他のものとともに発砲し、一名逃れた者の外は皆殺害されて了った。日本兵は藁を積み重ねて死体を焼いたといふ。他に同村にて殺された婦あり。又六名の基督信徒は、野外に曳き出されて銃殺されたといふ。果して然らばこれは憲法で保障せられた信教自由に抵触した迫害虐殺ではないか。之を政府に訴へ社会の輿論に訴へずして僅に一万円の見舞金を募ると。かくて社会の良心として起つべき教会の責任を如何せんとするか。日本の基督教会の指導者諸君は老ひたるか。

(「教会同盟と朝鮮問題」『文明評論』第6巻第8号, 1919年8月11日)

「日本の基督教会の指導者諸君は老ひたるか」と柏井が訴える「日本基督教会同盟」の理事には恩師の植村正久も含まれていた。



「寄付金」を募集する日本基督教会同盟の公告を掲載した『福音新報』第1254号 (1919年7月10日)

また、同年7月の朝鮮神社創立に際しては、「内閣諸公の政策」を批判して次のように述べている。

七月十八日内閣告示第十二條を以て京城南山に朝鮮神社（祭神天照大神明治天皇）を創立し、社格を官幣大社に列せらるゝ旨布告せられた。如何なる神を祭神とすべきかは内閣の評議によりて定められたものであらうが、此の神社は在朝鮮の日本人の為であるか、將た朝鮮人の為であるか、神社は宗教でない祖先崇敬の場処であるとは当局者の口を酸くして説く処である故、これは祖先を異にせる朝鮮人の為ではあるまい。朝鮮人の為めならば、彼等の祖先を祀ってやるべき道理であるまいか。政略から云ふと千九百年前羅馬帝国の政治家が土地の神とカイザルとを合祀した方法が今の内閣諸公の政策よりも巧であったことは争はれぬ。

（「今と昔」『文明評論』第6巻第8号、1919年8月11日）

当局が説くように「神社は宗教でない祖先崇敬の場処である」ならば、朝鮮神社は朝鮮人の祖先を祀るべきであるのに、その祭神を「天照大神明治天皇」とした内閣の評議に、柏井は疑義を呈しているのである。

また、朝鮮伝道を展開していた組合教会の「新聞雑誌」の論調と渡瀬常吉の発言をとりあげ、柏井は次のように述べている。

組合教会の鮮人伝道は総督府からどれだけの便利を受けつつあるやを知らず、然れども常に革新の先鋒に立ちつゝある我が組合教会の新聞雑誌が躊躇逡巡、弁護申訳の地位に立ち、天下の志士と論調を同ふし得ざるは、気の毒に堪えざる次第である。日本組合教会たるもの事実を明かにし世人の惑を解くか、若し総督府と何等かの関係あらば断然足の塵を払い、単純清白に意見を発表し得べき地位に立つべきである。渡瀬〔瀬〕常吉氏の如く『これは堪へ難い虐政忍ぶべからざる暴横と云ふ様に考へての騷擾事件とは思はれぬ。若しさうであれば百姓や地主や従来の旅客や実業家が中堅と為って、事を起さねばならぬと思ふ。然るに今度の発頭人は天道教と耶蘇教の一部と青年学生と仏教の僧侶であるから半島民族の一部に偏し居て、地方民に於ては百姓一揆の様な処もあるが、大体に於ては余程趣きが違つて居る。』などと苦しい弁護をせねばならぬとは余りに情けなきではないか。

（「組合教会の重荷」『文明評論』第6巻第8号、1919年8月11日）

朝鮮における日本の武断統治の問題性を、教会は今こそ直視しなければならない。柏井が朝鮮をめぐる上記の問題を取り上げた『文明評論』第6巻第8号（1919年8月11日）の巻頭には、社説「我等の祭壇」が掲げられている。その中で柏井は三・一独立運動鎮圧および堤岩里事件について「これ我等が神の祭壇の前に出でて懺恨痛悔して赦しを求むべき国家の罪惡である」と断じ、「日本国民全体」を「隣邦の怨府」となす「国家を誤る」勢力を倒さねばならない、と訴えている。

国家も亦一の大なる祭壇であらねばならぬ。政は「祭り事」である。人の喜びを求むるにあらずして神の喜びを求め、民衆に対して責任を負ふのみにあらずして天地の主宰者の前に責任を負ふ心より国家の政治が為さるるにあらずば其の政治は墮落せざるを得ない。

祭壇は懺悔の場である。凡そ真純な信仰心の発動する処に、懺悔の情念の表はれぬ処はない、自己の罪の為に又た他人の罪の為に。今や日本の先覚者が国家てふ祭壇の前に立つとき、先づ持つべきは懺悔の念であらねばならぬ。何となれば我が国は、東洋に於て最も多く天の恵沢殊寵に浴した国である、本来の価値よりもまさり、善き運命に導かれ、幾多の隣邦にまさりて生活の幸福を与へられたものである。『多く托せられたるものは亦多く求めらる』るは天地の理法である。我が国民の先覚者たるもの此の優越的地位に背かざらん為には、他の民族と並に存して之を啓導するの地位に立ち、取らんよりも与ふる為に意を用ふべきであった。又かく考へた人もないでなかった。然れども日本国の国是は不幸にして軍国主義の政治家によりて左右せられた。日本国を代表して隣邦に駐割せる使臣さへ涙を吞んで彼等の政策を傍観せざるを得ず、歴代の外務大臣でさへ自ら好まざる要求を提出せざるを得ざるに至らしめた勢力は築かれ、日本は二重の政治によりて支配せらるるような周密な制度は立てられた。其の結果は如何。日本国民全体として隣邦の怨府となり、世界の悪まれものとなり、国歩の艱難を憂へざるを得ざる今日となった。無論総ての場合に於て日本が非にして他国是なりと云はぬ。然れども日本の道徳的優越の地位から云ふも、他国よりも更に正しく、少くとも他国の正しき勢力を助けなければならぬ。然れども実際はさうではなかった。これ我等が神の祭壇の前に出でて懺恨痛悔して赦しを求むべき国家の罪悪である。然して国家を誤るこの勢力を倒さんが為に、政治家も宗教家も大学の教授も学生も新聞記者も猛然起って十字軍を興し、我が愛する祖国を主としては軍閥、続きては財閥、官僚、宮中閥の手より救ふべきである、これが我等の祭りでなければならぬ。ただ健全なる国民の間から、殊に純白な青年のなかから身を祭壇に捧げやうとする人々の多く起らんとする兆候あるは我等の意を強ふする所である。

(「我等の祭壇」『文明評論』第6巻第8号、1919年8月11日)

これより先、ヴェルサイユ講和条約の調印に際しては「独逸の軍閥の如く国家の大計を誤ることがあっては取り返しつかぬ事となる」として、今後キリスト者は日本軍閥との〈戦い〉を覚悟しなければならないとして次のように論じられている。

之から暫くは英米人の勢力世界に揚る時代となるであらう。彼等は莫大の犠牲によりて得た優越の地位を如何に用ひるであらうか。自国の威力を張る為めか、将た今猶ほ飢え悩みつつある無数の人類に奉仕する為めか、彼等は岐路に立ちつつある。最も謙抑を要する時である。(中略)

突飛な企業的な米人は別けて大仕懸な活動を試るであらう。ここに日本軍国主義者の乗すべき機会が生ずる。

軍国主義の本城は既に陥った。然れども出城なる日本の軍閥は依然として勢力を張って居る。彼等の敵は兎に角軍閥打破の為に戦った英米両国である。彼等は時には一国の国是を犠牲としても猶ほ軍閥の勢力を維持することを勉むる。ここに於て英米国民に対する国民の反感を挑発する為に、種々なる報道風評を播布するであらう。民主的傾向を帯びた内閣を倒すことも謀るであらう。由来手段を択ばぬは官僚主義の痼疾である。彼等が最も利用し得べき者は恐く新聞記者である。日本を誤る者ありとせば、軍閥と新聞記者の結託から来るであらう。然してそれはただ一の仮想でなくして我等は目のあたり憂ふべき徴候を見るのである。

基督教徒亦彼等に取りて好ましい団体でない。我等基督教徒は大なる戦争が来ることを覚悟しなければならぬ。世界の大勢は長く之に逆ふことを許さざるべきも、孤立援けなきものは城を枕にして斃るまでに案外猛烈に戦ふかも知れぬ。これ彼等の自由なれどもも独逸の軍閥の如く国家の大計を誤ることがあっては取り返しのつかぬ事となる。我等の戦未だ終結を告げず。（六月二十四日）

（『講和条約調印』『文明評論』第6巻第7号，1919年7月1日）

世界大戦はとりあえず終結したが、日本のキリスト教徒は軍国主義を掲げる勢力との「大なる戦争」を覚悟しなければならない。「我等の戦未だ終結を告げず」。当時柏井は千駄ヶ谷教会牧師に就任して三ヶ月、これらの言葉には、当局にとって「好ましい団体でない」ものとなりつつあった教会の責任者としての重みを感じられる。

おわりに ——晩年の神学思想について

1920年3月発行の『文明評論』第7巻第2号巻頭に置かれた論説「時代と神観」は、激動する外部世界との対峙の中で、柏井の内部世界に輪郭をとってきた「神観」と、それに基づく「道徳」および目指すべき社会の姿を示している。やや長くなるが引用しておきたい⁸。

神は偉大なる道徳的權威である、其れとともに神に大なる自制があり美しき謙抑がある
と云ふ一義も亦た、前代曾て見ざりし痛切を以て観得せられつゝある。これ神が単に力であるのみならず道徳的の力であり愛の力である所から生ずる信仰であって、基督世に出づるよりも遠き昔の旧約の詩人でさへ『汝（神）の謙遜我を大きくなし給へり』（詩篇十八〇十八）と歌ふた。神の子たる基督尊榮の位を棄て己を虚くし弱き人の子の形を以て世に下り給ふたと云ふ基督者の信仰と、之を基礎として建てた教理とは、世界の神観に曾て無

かりし奥妙な思想を供給した。故に謙抑自制は人の道徳であるのみならず神に存する道徳であると云ふ観念は決して新奇なものではない。此等の徳は其源を神性に発して居ると云ふのが基督者の信仰である。(中略)

創造に際して神の択び取るべき途が蓋し二つあった。冒険の道と安全の道とがそれである。神これ世界と云ふ風の世界なれば安全である。神の意志が必然的に人の意志となるならば人間の社会は安全であったであらう。然れども造物者の眼界には独り安全てふ目標が聳えて居たのみならず又た靈的と云ふ目標も輝いて居た。自由の風の吹かぬ所に靈的の花は咲かぬ。自由のある処に若干の不安全あるは免れぬ所であるが、無限の信任と自発的の服従と利害に囚はれぬ愛とは其処にのみ発生する。是に於て神の創造し給ふた世界は、一の意志が総ての意志を吸収したる世界でなくして、多くの意志が並び存して終に自発的の調和に達する世界である。これは神に取りて容易ならぬ冒険であるとともに又大なる自制を要する。完全な自由と独立と權威とはひとり絶対人格者なる神にのみ属する。之とともに或る程度の自由と独立と權威とを有する存在者の存在を許さうとせば、神は自ら制限し自ら譲りて、並立並存のあり得る天地を造らねばならぬ。

是の如く観た神の政治と、我等が聖書から学ぶ教理とは良く一致する。彼は此れによりて全くせられる。然して我等が之を与へられたことを感謝し尽きざる崇高にして親しみある神観を我等に与へる。然して多くの点に於て神より遠かれる現代も、此の方面を前代に比して強く我等に印象する事はこれ亦我等の感謝する所である。

故に国を立つるに於ても、一身を処するに於ても力よりも徳を主としなければならぬ。且つ其の徳は道徳上唯一の本源より発する徳であつて、又之に服従し之に倣ふ徳であらねばならぬ。これが現代思想から神観に影響し、現代思想を動かして行く思想の重要なものゝ一であることを疑はぬ。

(「時代と神観」『文明評論』第7巻第2号、1920年3月1日)

「謙抑自制する神」という神観を源泉とする「謙抑と自制」の徳を基盤として、「一の意志が総ての意志を吸収したる世界でなくして、多くの意志が並び存して終に自発的の調和に達する世界」の形成が目指されねばならない。それこそが、神の創造になる世界の本来の姿である。「国を立つるに於ても、一身を処するに於ても力よりも徳を主と」することが求められている。神の「謙抑」にならない、互いの自由と独立を尊重し、他者・他国との「並立共存」を重んじ、それを脅かす国家権力や軍部の驕慢と専制に対しては、断固として戦わなければならない。――このような「神観」とそれに基づく倫理を追求する柏井の思想は、上述のような外部世界との激しい折衝の中で形成されたものであった。

本稿では、柏井の〈評伝研究〉の一環として、『文明評論』誌上に柏井が発表した時局論から、

とくに軍国主義批判に関わる言説に焦点をあてて検討した。かような文明批評家／ジャーナリストとしての側面と、キリスト教史家・新約学者としての側面、そして牧師・説教者としての側面など、様々な〈顔〉を持つ柏井の全体像をトータルに描くことが〈評伝研究〉の課題となる。そのための基礎作業となる年譜・著作リストの作成も、今後あわせて進めていきたい。

注

- 1 東京神学大学図書館には『文明評論』の全巻号が保管されている。本稿の作成に当たっては、同図書館と併せて東北大学附属図書館、東北学院大学中央図書館所蔵の『文明評論』も閲覧した。
- 2 本略歴は、柏井光蔵「柏井園年譜」〈『柏井園記念講演』、1956年8月、謄写印刷。〉、および武田清子・小澤浩・岡田典夫編「年譜・柏井園」〈『明治宗教文学集（二）』（明治文学全集八八、1975年7月、筑摩書房。）に基づきつつ加除訂正し、筆者の調査で明らかになった新たな事実を加え作成した。
- 3 翌年1月1日発行第2巻第1号巻末に掲げられた新年の挨拶文には、原戊吉・千磐武雄・千屋和・逢坂元吉郎・川添万壽得・柏井園・横田貞治・田中達・秋月致・南廉平・白井胤禄の11人の名が連記されている。

- 4 例えば次のような言及がある。

十二三年前ヘンリー・ヴァンダイク博士は基督教文学の任務を論じて第一に武力崇拜の気風と戦ふこと、第二に富の崇拜と戦ふこと、第三日に増し行く軽薄の風と戦ふべきことを説きしを記憶致し候が、今も一貫して同じ精神を以て立ち居らるゝを喜び申し候。

（「編輯だより」『文明評論』第5巻第2号、1918年2月1日、署名なし）

第一号に載せたる小文のうちにヘンリー、バンダイクの言を引用し（何より採りしか記憶せざれども）基督教文学の戦ふべき敵三あるを挙げ、第一は武功と戦功とを崇拜する気風、第二富の崇拜の増長、第三の敵は軽薄の精神の増長なりと云ひしに賛成致し候ひしが、今日この戦は更に現実に激烈になりしと見て、基督教文学の責任を思ひ申し候。

（「青年の為の開拓者たれ」『開拓者』第13巻第2号、1918年2月1日）

Henry Jackson Van Dyke Jr. (1852-1933) は米国の作家・牧師で、プリンストン大学では長く英文学の教授も務めている。

- 5 松尾尊発「三・一運動と日本プロテスタント—日本プロテスタントと朝鮮（二）—」（『思想』第553号、1968年11月、岩波書店）は、後述する『文明評論』所載の日本基督教会同盟批判を引用している（筆者が柏井であることは認識されていない）が、「田川大吉郎論文筆禍事件（元老が天皇をあやつっているという意味のことを書いて、朝憲紊乱とされる）以来、政治問題論評を避けていたが…」（前掲56頁、上点引用者）と記述している。しかし事実はそれと異なるのであって、上述のように田川事件以後も『文明評論』は政治問題を正面から論じ続けていた。

- 6 同号巻末には、執行猶予期間が明けた柏井の次のような報告と謝辞が見える。

一昨年〔1917年〕本誌所載の田川大吉郎君の文章により当時の発行人編輯人ともに新聞紙法に問はれ満二ヶ年の執行猶予の宣告を受け候ひしが烏兎匆々早くも二ヶ年を経過し、去る三月十九日を以て無事其の期を了し申し候。多少の不便を被りたるも、又種々新しき経験を、諸友の深厚なる同情に浴したることを感謝致し居り候。
- 7 植村正久もこの *The Japan advertiser* の記事（別掲図版）で堤岩里事件を知ったとみられる。植村は説教の中でこの事件に言及して「義憤」を現したと伝えられ（齋藤勇「植村正久と『或る殺戮事件』」、『福音と世界』1966年12月）、その説教に触発された齋藤勇は5月4日付で詩「或る殺戮事件」を書いている（『福音新報』第1247号1919年5月22日発行に掲載）。
- 8 柏井は1919年の梅雨ごろから体調を崩し、同年の基督教青年会夏季学校では病を押して講演を行っているが、その一部を伝える筆記「神に関する思想の一面」（『開拓者』第14巻第8号、1919年9月1日）においても、この「時代と神観」と同主旨の「思想」が述べられている。柏井は召天前、その病床で長男光蔵に、あと10年余命を与えられるならば「恩寵と道徳」についての英文著作をまとめたいという希望を語ったと伝えられている。この「神観」は、その神学思想の一部を構成するものであったと考えられる。

〔付記〕本稿は、2017年1月21日に立命館大学茨木キャンパスで開催された第9回東アジアキリスト教交流史研究会ワークショップにおける研究発表原稿を基に作成したものです。ご助言を賜った諸先生方にこの場を借りて感謝申し上げます。

En Kashiwai's Criticism against Militarism: Analyzing His Articles and Arguments in the Magazine *Bunmei Hyoron*

IMATAKA Yoshiya*

Abstract

En Kashiwai was a prominent pastor of the Church of Christ in Japan. One of his main themes as a speech activist was the criticism against militarism. In this article, his writings from the magazine *Bunmei Hyoron* will be analyzed to shed some light on his achievements as a social critic.

Keywords

history, militarism, Christianity, independence movement, the First World War

* Correspondence to: IMATAKA Yoshiya
Teacher, Miyagi Gakuin Junior and Senior High School
E-mail : imataka@mgu.ac.jp

